

2011年6月12日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：詩篇8篇

説教題：人とは、何者なのでしょう

1 主の指のわざを見る

この季節、太陽の光、そよぐ風、鳥や蟬の声、咲き誇る草花。そのようなものが満ちております。この景色を見て、私たちは感動します。そしていろいろなことを考えさせられます。

ダビデもそうでした。3、4節でこう告白しております。「あなたの指のわざである天を見、あなたがたを整えられた月や星を見ますのに、人とは、何者なのでしょう。あなたがこれに心を留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。」

ダビデはあるとき羊や牛が草を食み、野には獣が歩き回る姿を観察しました。空を見れば鳥がさえずり、羽ばたいている。海には魚が群れています。また夜になって天を見上げました。そこには月がありました。月がないときは満点の星が空を埋め尽くしていました。生まれたときからのおなじみの風景です。けれども、改めてこの風景を見ているうちに、あることに気がついていきました。そのことをこれから見ていきます。

2 二つの疑問

聖書では最初からこの世界は神の御手によって造られたものであることをはっきりと語ります。ダビデはもちろんそのように信じておりました。しかし、多くの人たちはそのようには信じておりません。

かつて私は口で堂々と「無神論者です」と

宣言していました。とは言いながら、私の中には二つの疑問がいつもくすぶっていました。一つは、この自然界がなぜこんなに美しく調和しながら存在ことへの疑問でした。科学は、この世界がどのように存在するのかは説明しますが、なぜ存在するのかについては、何も教えてくれません。誰かに教えてもらいたいと思うのですが、だれも教えてくれませんでした。

そして二つ目の疑問。それは一つ目の疑問とも重なるのですが、自分はなぜこの世界に生まれてきたのか。自分は何のために存在するのか。そのことを知りたいと思いました。そのことを考えるのですが、わかりません。だれも納得する答えを教えてくれません。そのことで私は悩み続けました。

3 被造物と人間

このことに関連して、パウロはローマ書1章20節でこう言っています。「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」

パウロは二つのことを言っています。一つは、私たちの周りにある自然の姿をつぶさに観察すれば、だれでも神がこの世界を造られたことを認めるはずだ。そしてもう一つ。この造られた世界の美しさと、私たち人間を比べたらどうか。私たちはいかに神に逆らっている者なのか、だれもそれに対して弁解する

ことはできない。

どんなに目立たない草花でも、よく観察すると、美しい色合い、姿形、香り、すべてが美しく整っていることに驚きます。すべてが神の御手によるものです。聖書的な表現をするなら、どんなに小さな草花であっても、美しく咲いていることそれ自体が神の栄光を現していると言います。天の月や星も、決められた所を走ることが神の栄光を現していると表現します。

翻って、人間はどうか。私たちも神の御手によって造られました。何も考えなくても、からだはすばらしい機能を発揮し、健康を保つようにと24時間活動しています。表の目に見える部分では神の栄光をある程度現していると言っても良い。でも、目に見えない部分ではどうなのでしょう。私たちの内側には何があるか。欲望があります。あれも欲しいこれも欲しいという願いでいっぱいです。自分にとって都合が悪い人がいれば、心の中で平気で人を殺し、恥じることはありません。この神が造られた世界の中で、人間だけがルールをはずれ、やりたい放題のことをしています。被造物の美しさに比べれば、人間の内側はあまりにも汚れている。弁解の余地はない。パウロが言うとおりで。

4 人とは、何者なのでしょう

聖書がすばらしいのは、そこで終わらないことです。ダビデは4節で告白しました。「人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。」

もし神が造られこの世界のことを、造りっぱなしにして、後は知りませんと放り出し、関心を持たない方であるなら、何の希望もな

かったでしょう。しかしダビデは気がつきました。神は私たちのひとりひとりに心を留めてくださっている。顧みてくださっている。これは驚きです。というのは、先ほど触れように、私たちはやりたい放題のことをしてきました。神が折角敷いてくださったルールを「こんなのはいやだ」と言って踏み外し、神に逆らい続けてきたのです。心の内には美しいものなど一つもない。汚れた私たちです。役にも立たず、火に投げ込まれておしまいのような者なのに、そんな私たちのことを神は気にかけてくださっている。いや、そんな生やさしいことではない。私たちが失ってしまった、あの生きる喜び、あの栄光、あの神と共に歩むことのすばらしい恵み。私たちがいのちをいただき、生きる目的がはっきりとわかっていたときの、あの最初の状態に回復させなければならぬ。罪に苦しむ私たちを救わなければならぬと、神は考えてくださっている。

そのことを知った時、ダビデは驚き、戸惑いました。「人とは何者なのでしょう。」神のひとり子が十字架でいのちをお捨てになるほど、自分はそんなに価値ある者なのだろうか。この世界を見ると、自分はあまりにもちっぽけで、その上汚れ果てているようにしか見えません。しかし、主は、この世界のどんな美しい花よりも私たちをもっとすばらしい存在であると考えてくださっています。

この世界を観察し、その美しさに感動すればするほど、神はそれ以上に私たちを大切にされている。その恵みに気がつかされて参ります。神の御手は、天と地に及んでいます。その神の御手は、私たちの目には見えないこの内側にまで及んでいます。